

1.上山・西二又・上大沢・大沢の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6955

1. 上山・西二又・上大沢・大沢の概要

鏡 味 治 也

1. はじめに
2. 西保地区の概要
3. 調査対象 4 集落の年齢別人口構成と世帯類型
4. 4 集落の農業の概観
5. 4 集落の漁業の概観
6. おわりに

1. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2006 年度の調査実習を輪島市西保地区の大沢・上大沢・西二又・上山の 4 集落を対象に実施した。本報告書はその調査実習に参加した学部 3 年生と大学院修士 1 年生および教員が、おもにその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、当研究室の調査実習報告書としては 22 冊目のものとなる¹⁾。

今年度の調査対象とした西保地区は、1889（明治 22）年から 1954（昭和 29）年までは西保村として単独村政を実施し、1954 年に旧輪島町ほかと合併して輪島市の一部を構成することになった地区である。輪島市は 2006（平成 18）年に西隣の門前町と合併したが、それまでは西保地区は輪島市の西端に位置し、門前町に隣接する漁港と山村の地域だった。単独村政時代には、東の旧輪島町方面への道路はなかなか整備されず、むしろ山を越えた門前町とのつながりのほうがより密であったという。西保地区が輪島市の一部になって以来、海岸部を通して輪島市街地に通ずる道路が急速に整備され、生活面でも輪島とのつながりが中心になっていくが、それでも輪島市街地や門前町の中心地区からは幾重にも重なる山並で隔てられた地域であったことは変わりなく、それゆえに旧輪島市の中でも独特の風俗を残す地域と言われている。

こうした西保地区の中で、本実習調査は上山・西二又・上大沢・大沢の 4 つの集落を取り上げて、そこでの住民の生活の変化と現況の把握を聞き取りと観察を通じて行い、本報告書はその成果報告になる。これまで同様、2006 年 8 月初めに 1 週間かけて行った本調査では、参加学生はとくに自分の調査テーマを決めず、地域の生活の総体について幅広く聞き取っていく方法を用いた。本調査の終わりの段階で各学生にそれぞれ関心をもったテーマをあげさせ、以後はそれぞれの学生の関心にもとづいた補充調査を随時行った。本報告書はそうした学生各自のテーマをもとにした章構成をとっているた

め、全体として対象とした集落に関する調査内容を網羅するかたちにはなっていない。それを補足する意味で、まず本章では調査対象の4集落の概要を提示したい。

2. 西保地区の概要

西保地区には上山、西二又、上大沢、大沢、赤崎、下山、小池の7つの集落がある。上山、西二又、上大沢は、西保地区の西部を流れる男女滝（なめたき）川流域に位置し、上山はその上流部、西二又はその中流部にある山村で、また上大沢はその河口部にある農漁村である。大沢は地区中央の、背後を山に囲まれた漁村で、旧西保村の村役場や小学校が置かれ、西保地区の中心集落であった。赤崎、下山、小池は地区東部の海岸に近い丘陵部に位置し、農業を中心とした生業を営んできた。

表1に1889（明治22）年および1965年以降の各集落の人口と世帯数の動態をあげる。

表1. 西保地区各集落の人口・世帯数動態（上段：人口、下段：世帯数）

	1889	1955	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
上山	348	298	265	229	206	199	197	170	141	126	115
	50	48	50	46	46	46	46	46	44	43	43
西二又	194	180	130	109	98	92	84	81	77	67	62
	28	28	26	25	24	24	23	23	23	23	23
上大沢	136	152	126	96	97	87	85	91	82	77	72
	21	20	20	20	20	20	21	21	21	21	20
大沢	565	635	490	462	430	376	328	275	249	237	213
	120	121	112	107	102	99	97	95	94	91	81
赤崎	95	90	64	65	54	50	47	49	41	33	30
	15	14	13	12	12	11	11	11	11	10	10
下山	321	323	242	220	209	219	219	203	167	155	147
	50	55	50	50	50	49	47	47	46	47	48
小池	182	179	143	122	120	113	107	112	90	75	69
	32	29	26	26	26	25	26	27	26	26	24
計	1,841	1,857	1,460	1,303	1,214	1,136	1,067	981	847	770	708
	316	315	297	286	280	274	271	270	265	261	249

出所：1889年の数値は『角川日本地名大辞典 17 石川県』（1981）より、1955年の数値は『西保村史』（1960）より、1965-2005年の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より

単独村政時代の数値が得られないため、その間の動態に関して確かなことはいえないが、その前と後の数値を見る限り人口も世帯数もほぼ横ばいの状態を示している。それがその後全体的に減少傾向を示し、世帯数はさほどではないものの（2005年の総数が1955年の8割）、人口の減少が著しい（同

じく4割)。これはつまり世帯人口の減少であり（1955年は1世帯平均5.9人、2005年は2.8人）、内容的には少子高齢化、とりわけ高齢者の夫婦や単身世帯の増加にほかならない（世帯類型については後の節でさらに検討する）。

個別の集落について見ると、上山、西二又、大沢、赤崎は集落人口が1955年から2005年までにはほぼ3分の1に減少しており、小池もこれに近い。下山と上大沢でも2分の1以下になっている。集落によって差があるが、いずれも教育や就業の不便さから都市近郊に移り住む人が増えていることを物語っている。

人口の減少に比べて世帯数の減少がさほどではないのには、いくつかの理由が考えられる。世帯数の減少にも集落で差があり、上山は65年からと90年からの2段階で微減、西二又と赤崎は70年までに微減して以後横ばい、上大沢は一貫して横ばい、大沢は65年以後一貫して減少、下山と小池は65年までに微減して以後横ばいである。大沢の減少が目立つのは、単独村政から輪島市への合併と、それともなう輪島市街地への道路の整備によって、地区の中心的集落としての町的な機能が低下したことが理由の一つとして考えられる。他の集落が微減や横ばいに留まっているのは、交通状況の改善により車を使えば輪島市街地や近隣地区の職場まで比較的短時間で通えるようになったことが、ある程度働いていると思われる。上大沢の世帯数維持については、この集落が小規模ながら結束が固く、江戸時代の能登に見られた戸数制限／維持制度であるツラ制度の伝統を今も残すいっぽう、漁港のほか西保では比較的まとまった面積の水田を有し、しかも種々の事業を試みる進取の気風にも富んでいるので、ここだけは若い夫婦や子供がめずらしくないという話をよく耳にした。

既に触れたように、西保地区の主産業は農林業と漁業であり、大きな会社や工場は地区内に立地していない。にもかかわらず林業は1970年代以降は収入が上げられるような状態ではなくなり、農業も近年の輪島市街地に近い集落での野菜栽培をのぞけばそれだけで生活を支えることはできなくなっており、かつては出稼ぎや輪島塗の下請け産業とでもいえる椀木地づくりなどの副業が、生活の重要な糧をもたらしていた。漁業にたよって生活している人も少なくなり、現在では会社や工場、役場、学校、農協などの勤めが生計の中心になっている。

こうした西保地区7集落の中で、本調査実習では上山、西二又、上大沢、大沢の4集落を対象に取り上げ聞き取り調査を実施した。すべてを対象にすると対象としての規模が大きくなり過ぎることに加え、上山、西二又、上大沢はひとつの水系に連なる集落でありながら山村から農漁村までのバリエーションが見られること、大沢はこの地区の中心集落であったこと、大沢にある静浦神社の曳山が出る夏祭りや小串（おぐし）祭、上大沢や大沢の間垣（まがき）など独特の風習が見られること、などによる。以下ではこの4集落の世帯類型と農業、漁業の状況を検討していく。

3. 調査対象4集落の年齢別人口構成と世帯類型

まず4集落の年齢構成について見てみる。数値はいずれも2006年6月現在の住民票を基にしてお

り、先の表1での2005年時点の集落人口より多くなっているが、これはこの一年で人口が増えたというよりも、国勢調査と住民票の居住地選定基準の違いによるものであろう。

表2. 上山の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	0	4	6	2	5	12	11	12	7	1	60
女	0	2	3	0	8	5	18	16	11	2	65
計	0	6	9	2	13	17	29	28	18	3	125

表3. 西二又の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	2	0	5	6	0	8	5	6	4	0	36
女	1	2	3	1	2	5	6	10	4	0	34
計	3	2	8	7	2	13	11	16	8	0	70

表4. 上大沢の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	2	7	2	3	9	4	3	5	4	1	40
女	6	3	1	4	4	3	8	7	3	2	41
計	8	10	3	7	13	7	11	12	7	3	81

表5. 大沢の年齢別人口構成

年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	計
男	5	4	7	15	11	14	16	27	6	1	106
女	8	9	2	6	7	13	31	26	15	4	121
計	13	13	9	21	18	27	47	53	21	5	227

上の表では60歳代の人数を65歳以下と以上に区別していないが、65歳以上の人口だけをとってみると上山で集落全体の54%、西二又で43%、上大沢で40%、大沢で48%になり、いずれも高齢化の進んだ集落といえる。そのなかでも上大沢だけはどの年齢層にも比較的分散しているのに対して、残りの3集落、とりわけ上山では30歳代、西二又では40歳代の人数の少なさが際立ち、そのことがこれらの集落での子供の少なさをもたらしている。

次に各集落の世帯類型を見てみる。資料は同じく2006年6月現在の住民票を基にしている。

表 6. 4 集落の世帯類型

	上山	西二又	上大沢	大沢	計
核家族 (子供 40 歳以下)	2	6	2	12	22
核家族 (子供 40 歳以上)	8	1	3	9	21
拡大家族	16	5	12	19	52
単身 (60 歳以下)	2	1	0	3	6
単身 (60 歳以上)	3	2	3	19	27
夫婦 (60 歳以下)	0	1	1	0	2
夫婦 (60 歳以上)	14	8	1	25	48
計	45	24	22	87	178

世帯類型を見ると、これら集落の高齢化がいつそうよくわかると同時に、上大沢とそれ以外の集落の違いもはっきり見て取れる。上山、西二又、大沢では、60 歳以上の単身・夫婦世帯が集落全世帯のそれぞれ 38%、42%、51%を占めており、また核家族世帯も上山や大沢では子供が 40 歳以上のそれが少なからず見られる。それに対して上大沢では高齢者だけの世帯はそれほど突出していない。集落人口全体の減少もそうだが、上大沢以外の集落の高齢者世帯の比率の高さが今後の集落の行く末に大きな問題を投げかけていることは間違いない。

4. 4 集落の農業の概観

林業も含めた農業はこの地区の中心的生業のひとつだった。ここでは農業センサスと聞き取りのデータをもとに、調査対象 4 集落の農業の変遷を見ていく。

表 7. 上山の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	46	44	44	44	44	40 -39	38 -37	38 -27
専業 (販売)	0	-	-	1	2	- (-)	- (-)	-4
1 種兼業 (販売)	45	27	-	-	1	1 -1	9 -9	-2
2 種兼業 (販売)	1	17	44	43	41	39 -38	29 -28	-21
経営田面積 (a) (販売)	2,568	2,830	2,433	2,421	2,235	1,745 -1,735	1,608 -1,590	1,611 -1,444
経営畑面積 (a) (販売)	1,564	1,380	862	696	386	558 -548	313 -308	248 -199

出所：農業センサス農業集落カードより

上山は男女滝川上流部の山に囲まれた丘陵地帯に小さな居住区と田畑が点在する集落であり、農林業が生業の中心だった。1960年には農家のほとんどが1種兼業だったが、75年までには2種兼業に転換し、90年以降はその兼業農家数も減少してきている。

山間の傾斜地につくられた田が多く、基盤整備は1990年頃に道路ぞいの田でなされたのみであり、広さも最大で1反5畝だった。戸別の経営耕地面積は、1970年には1ヘクタール以上が半数以上を占めていたが、75年以降は0.5～1ヘクタールが主流になり、近年は0.3～0.5も増えている。集落全体の田の経営面積は85年から90年にかけて減少しており、農家数の減少と農業人口の高齢化が影響しているものと思われる。表には載せてないが、農業センサスのデータからは、85年まで男女とも30～59歳の農家人口が最も多かったのが、90年にはそれと60歳以上の人口が拮抗し、95年以降は60歳以上のほうが上回り30～59歳の数は急速に減少している。畑の経営面積も70年以降大幅に減少しており、畑作が生計に占める割合はもはや非常に限られたものになっている。

林業については戦前からこの地方の特産であるアテ（翌檜）を中心に木材の生産出荷が盛んで、また戦後10年くらいはナラやケヤキを使った炭焼きも盛んに行われた。木材の出荷は1970年頃まで盛んに行われたが、それ以後は収入が上げられなくなり、現在は細々と一部で行われているのみという。

表 8. 西二又の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	25	22	21	21	18	18 -15	17 -11	15 -9
専業 (販売)	1	-	5	6	-	- (-)	1 -1	-1
1種兼業 (販売)	24	14	5	5	2	3 -2	1 -1	(-)
2種兼業 (販売)	1	8	11	10	16	15 -13	15 -9	-8
経営田面積 (a) (販売)	961	980	730	778	679	615 -567	498 -393	419 -337
経営畑面積 (a) (販売)	1,286	1,000	780	841	327	279 -266	126 -97	106 -74

出所：農業センサス農業集落カードより

西二又の農業もまた上山と同様の変遷をたどっている。男女滝川中流とはいえ谷間の狭い土地に作られた田が多いが、下流部の開けたところにも一部ある。基盤整備は上山と同時期に下流部の開けた場所と道ぞいの田についてなされた。1980年までは農家数の半分程度の専業・1種兼業農家を維持したものの、それ以後2種兼業への転換が進み、農家数自体も減少している。田の経営面積は減反政策が始まる70年以降減少し続け、畑はそれ以上に80年以降の減少が著しい。戸別の経営面積は0.5～1

ヘクタールが主だが、0.3～0.5ヘクタールの農家も少なからず見られる。農家人口の年齢層についても上山と同様で、90年に30～59歳の人口と60歳以上のそれが拮抗し、95年以降は後者が上回るようになっている。

林業もかつて盛んだったが、儲かったのは1975年くらいまでだという、山は1963年の三八豪雪のときは大丈夫だったが、1991年の台風19号で大きな被害を受けた。戦後の炭焼きもまた盛んで、50年代終わりまで出荷していたという。

表9. 上大沢の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	20	19	19	19	19	18 -18	18 -18	17 -17
専業 (販売)	0	-	-	-	-	- (-)	2 -2	-3
1種兼業 (販売)	13	6	4	4	4	1 -1	4 -4	(-)
2種兼業 (販売)	7	13	15	15	15	17 -17	12 -12	-14
経営田面積 (a) (販売)	1,084	1,070	1,089	1,100	1,088	933 -933	945 -945	788 -788
経営畑面積 (a) (販売)	777	680	562	419	279	214 -214	162 -162	147 -147

出所：農業センサス農業集落カードより

上大沢の水田は男女滝川の河口部のある程度開けた場所にまとまっている。戸別の経営耕地面積も1970年以來0.5～1ヘクタールが多数を占め、1ヘクタール以上も95年まで数軒見られたが、近年は0.3～0.5ヘクタールの農家も増えている。

上山や西二又との違いは、全戸に対する農家数の割合を現在まで比較的維持していることで、これは先に見た年齢別人口構成や家族類型の違いを反映していると考えられる。ただし専業・1種兼業から2種兼業への転換はこちらの方が早く、70年にはすでに多くが2種兼業になっている。これは減反の始まりに先立ち、おそらく漁業というもうひとつの生業があることと関係していると思われる。集落全体の田の経営耕地面積は、2000年になって少し減少したが、それまでは堅調に維持してきた。ただし畑の方はもともと上山や西二又よりも少なく、70年以降漸次減少している。

水田の基盤整備は上山や西二又と同時期に、むしろ上大沢が先導して手掛け、場所が開けていることもあって最大で3反歩の田に整備した。しかし河口に近いことで海からの風を受けやすく、江戸時代にはノウテと呼ばれる3、4メートルの高さの風よけの堤防が造られたほどで、今でも風が当たる田では値の高いコシヒカリが作れなかったり、また山際の田は湿田が多く排水に苦労しているといっ

た話も伺った。

表 10. 大沢の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	103	92	86	85	78	70 -47	61 -38	45 -22
専業 (販売)	1	2	3	1	1	- (-)	4 -2	 (-)
1種兼業 (販売)	83	28	5	2	11	5 -5	1 -1	 -1
2種兼業 (販売)	19	62	78	82	65	65 -42	56 -35	 -21
経営田面積 (a) (販売)	2,930	2,820	2,548	2,974	2,480	2,148 -1,820	1,641 -1,297	1,103 -747
経営畑面積 (a) (販売)	2,669	2,060	918	1,450	654	991 -828	418 -322	181 -104

出所：農業センサス農業集落カードより

大沢の集落は背後を山に取り囲まれた海岸に位置しており、水田はその山を登った丘陵部にある。そのためアクセスの良くない遠方の水田は近年耕作が敬遠される傾向にあり、集落全体の水田経営耕地面積は1980年以降急減して3分の1ほどになっている。農家数もまた80年までは集落全世帯の85%以上あったが、その後その割合が減少し続け、2000年には全戸数の50%を割っている。専業・1種兼業から2種兼業への転換は75年までに見られ、上山での推移と似ているが、大沢の方が70年の時点での転換率は高く、しかも近年の販売農家の現象の度合いはいっそう著しい。大沢は漁業ももうひとつの生業としてあり、また旧西保村の中心集落として町的な性格が強いことも作用しているだろう。ここでは山間の田が多く、基盤整備は実施されていない。畑もかつては重要な生産基盤だったが、70年以降急速に減少し、今ではほんのわずかしかり利用されていない。戸別の経営水田面積は、85年までは0.3ヘクタール未満、0.3～0.5ヘクタール、0.5～1ヘクタールの農家にほぼ3分されていたが、以後は0.3ヘクタール未満がいなくなり、0.3～0.5ヘクタール経営の農家が主流になっている。農家人口では30～59歳の人口がまだ相当数見られるが、実際に農業に携わっているのは高齢者が中心のようである。

5. 4 集落の漁業の概観

上大沢と大沢は小さいながらも漁港を有し、それを拠点とした近海漁業が重要な生業となってきた。西保地区の漁民は西保漁業生産組合を組織しており、現在その組合員は141名である。地区内には大

沢に漁港が、そして上大沢にはより規模の小さな船だまりがあるほか、大沢より東の赤崎と小鶴入にも船だまりがあり、さらに下山にはさらに小さな船着き場である斜路が設けられている。西保漁業生産組合はこれらを基地に漁業を営む漁民のつくる団体である。

組合に登録されている漁船は、2～3トンのエンジン付き漁船が25艘あり、このうち20艘は大沢の人が所有している。これは1艘で1千万円ほどし、ソナーなどの近代装備も備えたものである。また伝馬船と呼ばれる船外機船も50艘が登録され、そのうち30艘が大沢の漁民の所有である。こちらは1艘70～80万円と手ごろだが、漁群探知機はついている。

西保地区の漁業は、近海での刺網漁と、海藻の採取が中心である。捕れる魚は、1950年代末まではイワシ、その後はアジやサバが多く捕れたが、最近はあまり大量には捕れなくなっている。刺網は夕方方に海に出て網を入れ、その夜か明け方に網をあげてかかった魚をとる漁である。また地区内には岩場が多く、サザエ網で捕るサザエ漁も盛んである。サザエ網は仕掛けてから1週間ほどして引き上げ、入ったサザエを捕る。海藻ではノリやワカメのほか、エゴと呼ばれる天草の一種で寒天の材料になるものがこの地区の特産で、採取したものを白くなるまで天日にさらして出荷される。このほかにも地区の漁場では定置網も仕掛けられているが、これは道具だけで1千万円ほどかかり、また県の許可がいるもので、この地区に仕掛けられる網はすべて輪島の人の所有である。定置網は5月の連休前から10月くらいまで張ったままにしておき、魚の入る部分だけを1日2回上げて魚を捕る漁である。

水揚げされた魚やサザエは、各自が車で輸送して輪島の漁協に出荷する。漁民各自の水揚げ高もそれぞれで管理する。網を上げてそのまま輪島港に船で運ぶことは、お金をとられるしじやまにされるのでしないようだ。なお輪島の人が所有する定置網は、船は大沢港に泊まるが、網を上げたらそのまま輪島港に運んで水揚げする。

西保漁業生産組合は船の燃料の手配などをするほか、地区の漁業権の維持管理をおこなっている。サザエ網の解禁日は輪島漁協の漁業権管理組合が決定し、平成18年度は6月11日から8月19日までと決められた。西保の組合はそれを漁民に通知する役目を果たす。また使用するサザエ網についても、5年ほど前から、1艘につき7把（ひと把で30センチくらい）つなぎで6刺までに制限している。1回の出漁で仕掛けるのは2刺程度がふつうという。さらに漁協に出荷できる殻の大きさも4センチ以上と決められている。いっぽうエゴの採取についても解禁日が設定されており、こちらは西保地区の組合で独自に設定している。さらに組合はアワビやサザエやヒラメの放流といった事業も行っている。

西保地区の漁船はひとりで乗る小振りなものがほとんどで、複数の船員が乗る船は、それぞれ5人ほどが乗り込む定置網漁の船が2隻大沢港に見られるのみである。この船乗りは能都町などから来ていて、空き家を借りた番屋（バンヤ）に泊まり込んで漁をしているという。大沢でもかつてイワシ漁やアジ・サバの刺網が盛んだった頃は、船にも複数の船員が乗り込み、そうしたときには船主とココ（水夫）の関係が強かったというが、今では比較的年配の男性がひとり乗り込んだ船が港に着くと、迎え出た奥さんとふたりでおしゃべりしながら、あるいは男性がひとりで黙々と魚やサザエを網から

はずす、といった光景が日常風景となっている。しかし漁業が大沢や上大沢の重要な生業のひとつであり続けていることは疑えない。

6. おわりに

以上、西保地区と、本年度の調査対象とした上山・西二又・上大沢・大沢の4集落の概観を、各集落の人口構成と世帯類型、その主要生業である農業と漁業の点から見てきた。輪島市街地や旧門前町の中心地区から隔絶した場所に位置し、道路状況が整備された今でも、あるいはそれ故にこそ、高齢化と世帯流出の波が押し寄せる中で、地区の暮らしが大きな転換点に差し掛かっていることが、以上見てきた概観からも窺える。しかしそうした地理的状況に置かれていたからこそ、独自の慣行や風習が築かれ維持されてきたことは、以下の章でお読みいただくとおりである。各章のテーマは学生各自が興味を持った事柄を優先したため、この土地ならではの貴重な事柄がいくつも抜けているであろうことはご容赦頂くほかないが、この土地らしさのいくつかがそこにすくいとられていれば幸いである。

短い本調査期間とその後の散発的な補充調査で得られたデータは限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多し。なにより学生の実習ということで調べる側の未熟さも言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多々あるものと自覚している。関係各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

¹⁾ 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。